

四条家の養子

咲良 ???

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

四宮家と敵対する四条家の養子、四条零。

そんな肩書きを持つ彼を四宮が放つておく訳がなく、指令を受けた早坂愛はいつものように主人の命令を遂行する。

しかしそれは四条零においても同じこと、自らの主人の為四宮について調査していくが……？

※この作品には一部不快に思われる表現がありますので、閲覧は自己責任でお願いします。

目

次

プロローグ

推し、白銀御行について

4 1

プロローグ

僕、一ノ瀬零は5歳の誕生日を迎えるはずだった日に四条零になつた。

一ノ瀬家は四条家お抱えの医者の家系だ。四宮家お抱えの例の医者と並んで評価されるぐらいには有名だつた。何故過去形なのかと言ふと一ノ瀬家当主である父はもう死んでしまつたから。そして僕には医者としての才能が無かつたからだ。

まだ5歳にも満たない子供に才能を見出す方がおかしいと思うが、あの家ではそれが『普通』だつた。四条の取り巻きに過ぎない一ノ瀬も、元はと言えば四宮に仕える駒の一つだ。四宮の教育は上に立つ者を育てる為にだけに特化している。ならば我が家門でも、と野心家で愚かな僕の曾祖父が考えたらしい。幼少期から動物の死体の解剖をさせ、人体の仕組みを理解し、大の大人でも分からぬような医学というものを子供の頭に叩き込むのだ。それは時に暴力を持つてなされた教育という名の地獄であつた。

前述した通り、僕には才能が無い。だから親にも見切りをつけられ、使用人達にも嘲笑われた。そんな屑みたいな父親でも医者としての腕は確かだつた。だから命を狙われたのだろう。

無論、四宮が真に狙つているのは四条家当主の命だろう。しかし、当たり前のことながらガードは固い。ならば、時点に殺さねばならないのは後継者か当主が床に臥した時、邪魔となる医者である。

四条家の後継者である四条帝は秀知院には進学せず、友達の居る公立の高校に進学したため懐に入ることが困難となつた。そのため父は常に命を狙われる立場にあつたのだろう。

まあ、実際のところどうだつたのかは分からぬ。常に神経を張り詰めて生活をしているストレスから幼少の僕に当たつたのかもしれない。どうしても僕はあいつらを親だなんて思わない。

僕の親は僕を育ててくれた四条家の方のみ。四条の為ならば僕はなんだつてしまふ。その過程で僕が命を落とそうとも。

そのように誓つたのだ。あいつらの葬式の際、なんの価値も無い僕のことを拾つてくれたの方々に。そこに腐つたみかんを排除したかつたという裏事情もあつただろう。

しかしあ優しい帝様、眞妃様の従僕として、身を粉にして働く所存だつた。

しかし、お二人はそれを望まなかつた。僕を本当の兄妹のように扱つてくれた。勿論、それでも僕が従僕であることには変わりなく、仕事はきちんとやらせてもらつていて。

とは言つても仕事は眞妃様の警護及びサポートが中心だ。帝様はほとんど自分でなんでもこなしてしまつたため、僕がやるのは一日の四宮の動向を報告するのみである。

僕が5歳の時から16歳になる今まで四条家と四宮家の抗争が収まる気配はない。だが、帝様と眞妃様は四宮との抗争をお望みではない。

ならば、僕のすることは一つである。お二人の手となり足となり、抗争を平和に終わらせることだ。

言うは易く行うは難しだが、必ずやり遂げてみせる。それがあの方々に返せる唯一のことだから。

今、四宮のご令嬢がどんな思いでこの抗争に巻き込まれているかは分からぬ。巻き込まれている、というのはこちらがそうだつたらいいなどという半ば理想に過ぎないがあながちそれが間違つていないと僕は知つてゐる。

僕はただの養子であり、有事の時には人柱となる身だ。秀知院は四宮の手先で溢れているはず。それなのに僕を何らかの形でも脅かさないのはそれなりに彼女が四宮に染まつていないと証もある。それを信じて行動を、なんてくだらないことはしないが少しごらいは期待してもいいと思つてゐる。

お二人のためなら命を賭けると言つたが命が惜しくない訳では無い。お二人をいつまでも支えるため長生きしたいのは事実だ。

また、高等部一年時は四宮のご令嬢が変化した時期である。その異

様な変化の裏に一体何があつたのかも調べなければならない。

したがつて僕は、四条と四宮の抗争を平和的に解決し尚、長生きをすることを第一目標、四宮のご令嬢に何があつたのかを調査しその秘密を明かすことを第二目標として秀知院学園高等部二年の活動を開始した。

推し、白銀御行について

約二年ぶりの更新ですつて奥さん。……当時どんな物語の展開を考えていたのか覚えてません。おそらく前話との繋がりが薄いと思われるで、それについては気が向いたら変更したいと思います（前話の方を）。

だいぶ雑に展開していきますが、暖かい日でご覧いただけますようお願い申し上げます。

あと誤字脱字等ありましたらどんどん指摘してください！多分自分でや気づかないでの！！

由緒正しき秀知院学園のだだつ広い廊下を観衆に囲まれながら堂々と歩く二人。我らが生徒会の会長と副会長である。

まあどれくらい由緒正しいかと言えば、その昔は貴族や士族を教育するための機関だったとかなんとか。今も編入制度があるとはいえ、純院、混院と区別される、というか明確な差別意識がある。現在それを感じるのは偏に白銀御行のおかげだろう。では何故差別意識が生まれるかと言うと、基本的に秀知院は附属幼稚園を入園してからそのままエスカレーター式に進学していくから。要するに箱庭の中で常識を学ぶのは難しいということだ。

時代を遡れば編入制度が始まつた当初、有力貴族達が平民を集め蠱毒じみたことをしていたりもする。無論この事が明るみに出ないよう厳重に情報統制が敷かれたが、それは学校外の話であり内部では逆に加害者を庇う声ばかりだったという。それ故に被害者のケアなどはなく加害者側は謹慎という名の休暇を与えられたのみだったし、その後も暫くは蠱毒じみたことが続けられていたというのだから恐ろしい。これは余談だが上記のようにケアなどは無く退学者が続出したことや真しやかに囁かれた噂も、編入者が少なくなった要因の一つ

だと思う。

話を戻すが、何が言いたいかというと、昔ほどでは無いとはいえた
世界は今よりももつと素晴らしい広大で残酷である”と言ったのだ。
そして”友人達と手を取り合い、そんな世界を協力して生きていこう
”と。

だから現校長は何度でも”学校とは小さな小さな社会であり、外の
世界は今よりももつと素晴らしい広大で残酷である”と言ったのだ。
”と。

果たしてこの学校に本当の意味で友と協力を出来る人が何人いる
だろうか。少なくとも今は一人だけだろう。誰にでも分け隔てなく
救いの手を差し伸べる、白銀御行ただ一人だ。だからこそ混院なのに
も関わらず生徒会長になれたのだから。

よく勘違いしている人がいる。勉学一本で学園を纏めあげ、生徒か
ら畏敬の念を抱かれている。故に白銀御行は生徒会長なのだと。残
念ながらその程度で纏まるようならそれは秀知院ではない。

かつては日本一と謳われた教育機関で勉学において最優秀の成績
を叩きだし、かつ目つきは悪いけれど困っている人を見逃さず必ず最
良の方法で助け出す。目つきは凄く悪いけど。

この三つという数字として見れば少なく、内容を見れば濃すぎるほ
どの経歴をもつて初めて白銀御行は生徒会長たり得るのだ。

何度も言うが、勉学だけで白銀御行は生徒会長になつた訳ではな
い。彼の努力と慈愛の心が今の彼へと繋がつていつたのだ。

さて、ここで皆が気になつてゐるであろうことに触れていく。

〈なんでそんなに白銀御行を推すの?〉

A. 友達であり推しだから。

〈どうして推しになつたの?〉

A. 調べていくうちに白銀御行という人間の素晴らしさに触れて
しまつた。そこからは沼だつた。

本当にこれに関しては僕自身もよく分からぬ。最初は混院の冴えない男子生徒だつた白銀御行は調査対象ですらなかつた。そんな彼が時の生徒会長に誘われ生徒会に入つたと聞いた時は驚きだつた。その後流れた噂によりその驚きは消し去られてしまつたが。

曰く、混院が氷のかぐや姫に勝負を挑んだと。しかも勉学で。

こんな噂が流れた時、僕は耳を疑つた。理由は分かるが余りにも無謀だと思つたからだ。生徒会に入会後、彼について調査をし、いくつか分かつたことがある。

それは彼の父親の会社が四宮によつて潰されたこと。それにより家庭が崩壊したこと。結果として貧乏な生活を送つていることも明らかになつた。

初めは復讐のつもりなのだと思つた。現実的に考えて庶民が四宮に勝つことは不可能だ。では学校では？限られた世界の中で血を滲むような努力をすれば勝つことは可能かもしれない。そう考えての行動だと思つていた。

それがどれだけ浅はかな考え方かも知らずに、僕は彼に近づいた。彼に取り入るのは簡単だつた。そもそもどうだろう、あの時の彼をきちんと認識していたのは生徒会役員のみ。金髪のなよなよとした混院、もしくは単に混院のやつぐらいにしか他の人達は思つていなかつたはずだ。

学校生活の中で誰も白銀御行として見てくれない。そんな折、白銀御行として自分を見てくれる人が現れた。それだけで十分だつた。

白銀御行からみて僕達は友達となり、僕は彼の人となりに触れていつた。そして自分の短慮を恥じた。僕は彼ほど努力をする人を見たことがない。あれほどまでに一つの目標に向かつて努力し続けられる人間を、生まれて初めて見た。

彼は四宮かぐやほどの才覚はなく、帝様のように自然に事を成せるような手腕もない。

虚勢を張らなければ飛んでしまいそうな、そんな人間だ。

それなのに、

”四宮かぐやの隣に並べる男になる”

その一心でここまで来た。そして今、額面通りにその言葉を受けとるのならばそれは叶っていると言える。

でも隣という言葉の意味がそうでは無いことを僕は知っている。だからこそ惜しいと思う。

四宮かぐやの隣に居るべき人間は白銀御行ではない。

ましてや白銀御行の隣に居るべき人間が、あの四宮の人間でいいはずがない。

白銀御行の一つアンとして、如何に四宮のご令嬢が染まっていないとはいえ、これだけは絶対に譲れない。

”蠱毒じみたこと” とは

×や×、×など本家とその傍系を含む計七つの名家の子息が、平民を集め戦わせ、勝ち残った者を一ヶ月間虐めるというもの。そういう遊び。

勝ち残らなかつた者はさらに傍系に回されるため記録には残つていらない。

当時の秀知院に編入するには学力はもちろんのこと、それなりに腕つ節の強い者でないといけなかつた。その為人死も出たとかなんとか。

蠱毒とは?と言われてしまえばそこまでですが語彙力がない故お許しくだせえ。

次は軽い設定集でも書こうかなと考えています。プロットとか何も無いけど。

あとこれ一応オリ主と早坂のいやラブ s s だつたりします。
く接点持たせないとなあ。

早